頭上、貼地生紫花、其花似見不見、闇結實如豆大、窠內有碎子、似天仙子、苗葉俱青、經霜卽枯、其根成窠、有餅箒密開、細長四五寸、微黃白色、味辛、

〔書言字考節用集六生植〕杜衡一名馬蹄香　石蘭同俗用此字謬、石ミヤマヌナハ杜葵、土細辛並同、俗以杜衡爲及已者謬、見本草、馬蹄香本草、杜衡葉似蹄、故云爾、

〔古今要覽稿草木〕ふたまかみ　かんあふひ　杜蘅

ふたまかみ、一名つぶねぐさ、俗名かんあふひ、一名ちやうじやのかま、一名おけばな、一名ちやがまのき、一名けのあふひ、一名つぼはなは、西土にいはゆる杜蘅一名馬蹄香、一名土鹵、一名土苓、一名杜葵、一名土杏、一名杜細辛なり、此物古飛驒國より貢せしこと、延喜式にみえたれど、今は處處山中陰濕の地に往々これあり、形狀は大略細辛に似て、一根兩莖或は三莖を生じ、數根相連りて數莖むらがり生ず、花は其兩莖の間より出て地上に貼し、狀細辛花に似て紫黑色、內空にして底に付て、蕊の如きものあり、其內に至て微細なる實數十粒あり、頗る罌粟子二ッ三ッに碎きしが如くにして、黃白色、葉はすべて光澤ありて、蟾蜍背の如し、一種武藏多磨郡に產するものは、其葉白斑なくして光澤稍薄し、其他また數十種あり、その形狀はくわしく本草啓蒙にみえたり、

釋名

ふたまかみ、本草和名、和名抄、名義詳ならず、つぶねくさ、同上按につぶ疑らくは、別に一種の草の名にてもあるべきが、さすればつぶねくさは、猶みらのねぐさの如く、根の狀全く其草の根に似たるによりて、命せし名なるべきか、かんあふひ、本草啓蒙、按に此草嚴寒の時といへ共、葉かれずして其狀葵の如し、故に名づく、ちやうじやのかま、同上、越後方言、按に此花の狀、頗るおけばなに似たるをいふ、ちやがまのき、同上、山城鞍馬方言、按に茶釜の如し、よりて名づく、もまた其狀相似るをいふ、きは甘草あまきといへるきの如し、がけのあふひ、同上、按にがけは山のかたはらをいふ、つぼはな同上、按につぼもまた其狀によりて名づく、杜蘅證類本草引名醫別錄、圖經本草、